

# 基礎看護学実習のカンファレンスにラベルワークを活用した

## 効果と課題

### ーカンファレンスの充実度からの分析ー

古田 桂子 (岐阜協立大学看護学部)  
馬場 貞子 (岐阜協立大学看護学部)  
野網 淳子 (大垣女子短期大学看護学科)

キーワード：基礎看護学，実習カンファレンス，ラベルワーク，教育効果

#### 1. はじめに

「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」(文部科学省，平成 29 年 10 月)のなかで、『臨地実習は看護の知識・技術を統合し，実践へ適用する能力を育成する教育方法の一つである。看護系人材として求められる基本的な資質と能力を常に意識しながら多様な場，多様な人が対象となる実習に臨む。その中で知識・技術の統合を図り，看護の受け手との関係形成やチーム医療において必要な対人関係能力や倫理観を養うとともに，看護専門職としての自己の在り方を省察する能力を身に付ける』<sup>1)</sup>と述べられている。臨地実習は数人のグループ単位で行われるが，実習の場では出会う様々な患者や様々な看護の体験について，カンファレンスという場を活用してその意味や解決策をグループで考え導いていく。その過程は，学生が自分の意見を伝えあいそれを集約して結論に至らせるため，まさに協同学習の場であるといえる。

しかし，実際の臨地の場で学生が展開するカンファレンスでは，活発な意見は少なく看護の知識や技術を統合するためにグループ内で議論を深める前に教員や臨地実習指導者(以後，指導者とする)に答えを求める場面がしばしば見られる。

実習カンファレンス(以下，カンファレンスとする)に関連した研究は多く，それは効果的なカンファレンスの実施が容易でないことを示している。学生はカンファレンスに対する苦手意識があり，意見を自由，活発に述べることやカンファレンスの進行への戸惑いが強いと言われている<sup>2) 3) 4)</sup>。また，効果的なカンファレンスの実現を阻む要因として，準備不足や自由に話せる環境<sup>5) 6)</sup>，緊張や不安<sup>7)</sup>が明らかになっている。しかし，学生の戸惑いや不安を軽減させることを目的としたカンファレンスの方法に関する研究は少ない。

そこで我々は，カンファレンスの準備性と討議を促進させるためにラベルワークという手法に注目した。ラベルワークは参画理論の権威である林が開発した参画型教育のツール<sup>8)</sup>で，個々の意見をラベルに書き，



















